

日本とアフリカの小中学校連携を軸とする ESD モデルの構築・実践の試み

実施機関 国際基督教大学

課題代表者 北原和夫

1. 目的

人々が移動し通信するグローバル化の時代においては、全く条件の異なる自然や社会の中にある人々が共有できる知や技の素養を見いだし、実際に教育プログラムの中に実装することによって、対等の立場で、持続的な世界を構築することができる。そのための第一歩として、本企画では、交流協定を締結している国際基督教大学とケープタウン大学(UCT)が、それぞれの近隣の小中学校ならびに教育行政部局と協同して、初中等教育レベルの ESD モジュール(カリキュラム構成、教材、教授法を含む)の開発を行うものである。そこにおいては、地域の伝統的知に根ざした「アジア・アフリカの智」をも持続的開発に活かすことを目指す。本企画の副次的目的としては、「国連 ESD の 10 年」の時間軸に合わせたさらに普遍的な開発モジュールの実践・評価計画を作成することを目指す。

2. 活動

対象地域 南アフリカ

2008 年 12 月 18 日実行委員会を発足させた。国際基督教大学、おおさわ学園、三鷹市教育委員会をメンバーとすることにし、ESD に関するそれぞれの取り組みについて紹介した。2009 年 1 月 23 日第二回実行委員会では、南ア事情についてブレインストーミングを行い、南アへの派遣団を決定。2 月 11 日の電話による UCT との事務連絡会議に基づき、2 月 13 日第三回実行委員会で派遣日程と行動計画を決定。さらに 2009 年度の活動日程も検討。派遣に伴い、映像記録を資料として収録するために、映像担当者を派遣メンバーに加えることとした。2 月 18 日第二回 UCT との電話による事務連絡会議。2 月 25 日派遣メンバーと UCT との電話による打ち合わせを行い、2 月 28 日—3 月 7 日の日程で、国際基督教大学教員 1 名、事務局スタッフ 2 名、おおさわ学園教諭 3 名、映像担当者 1 名からなる派遣団が UCT を訪問。UCT、現地学校視察訪問、ESD モジュール開発に関する今後の共同作業の在り方を検討。特に南ア側の大学と近隣学校とのネットワークを創設する。

3. 成果

(1) 期待する成果

日本と南アフリカの学校で教員が共有できる ESD モジュールを作成する作業の中で、自然や社会の状況が異なる地域が、世界的な持続性のために協同することの可能性が明示される。そして、地球の将来を担う子どもたちの対等の関係に立つ交流と協力が生まれる。

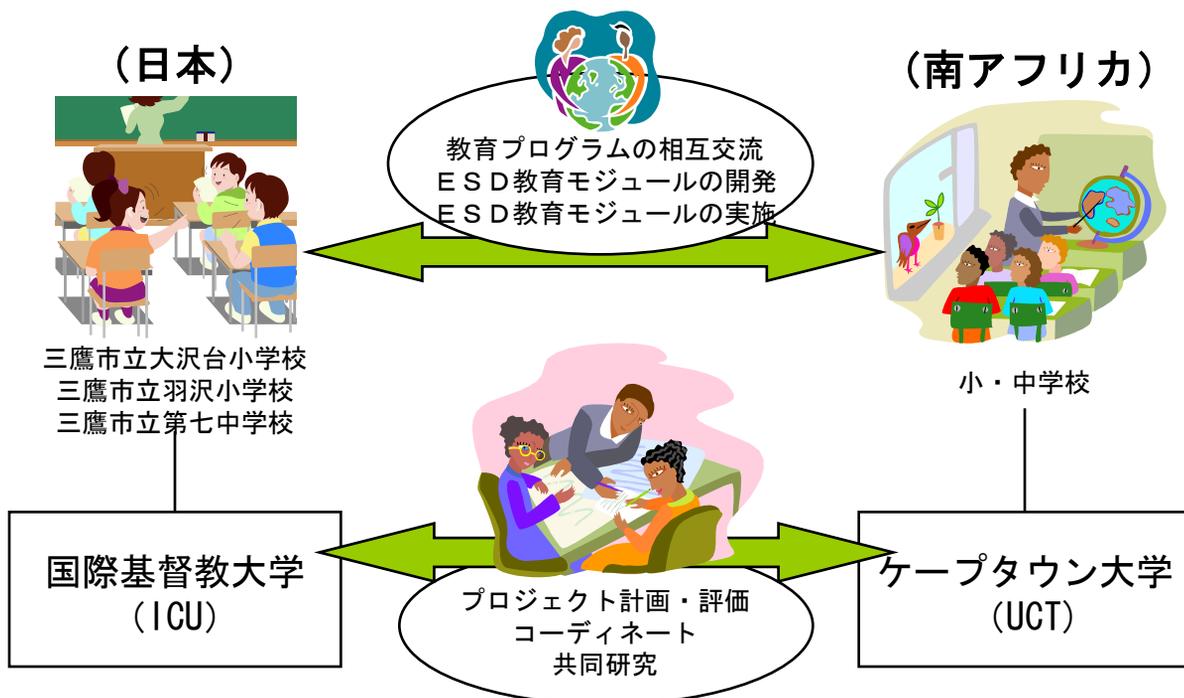
(2) 成果物 南アの状況、特に教育を巡る状況について、派遣団の報告、映像が今年度の成果となる。

目的

人々が移動し通信するグローバル化の時代においては、全く条件の異なる自然や社会の中にある人々が共有できる知や技の素養を見だし、実際に教育プログラムの中に実装することによって、対等の立場で、持続的な世界を構築することができる。そのための第一歩として、本企画では、交流協定を締結している国際基督教大学とケープタウン大学(UCT)が、それぞれの近隣の小中学校ならびに教育行政部局と協同して、初中等教育レベルのESDモジュール(カリキュラム構成、教材、教授法を含む)の開発を行うものである。そこにおいては、地域の伝統的知に根ざした「アジア・アフリカの智」をも持続的開発に活かすことを目指す。本企画の副次的目的としては、「国連ESDの10年」の時間軸に合わせたさらに普遍的な開発モジュールの実践・評価計画を作成することを目指す。

活動

2008年12月18日実行委員会を発足させた。国際基督教大学、おおさわ学園、三鷹市教育委員会をメンバーとすることにし、ESDに関するそれぞれの取り組みについて紹介した。2009年1月23日第二回実行委員会では、南ア事情についてブレインストーミングを行い、南アへの派遣団を決定。2月11日の電話によるUCTとの事務連絡会議に基づき、2月13日第三回実行委員会で派遣日程と行動計画を決定。さらに2009年度の活動日程も検討。派遣に伴い、映像記録を資料として収録するために、映像担当者を派遣メンバーに加えることとした。2月18日第二回UCTとの電話による事務連絡会議。2月25日派遣メンバーとUCTとの電話による打ち合わせを行い、2月28日-3月7日の日程で、国際基督教大学教員1名、事務局スタッフ2名、おおさわ学園教諭3名、映像担当者1名からなる派遣団がUCTを訪問。UCT、現地学校視察訪問、ESDモジュール開発に関する今後の共同作業の在り方を検討。特に南ア側の大学と近隣学校とのネットワークを創設する。



成果

今回の派遣によって、南アの教育事情の理解を深め、また両国の教員間の相互理解による今後のESD共同開発の基盤を作る。日本側の検討のための資料としての映像を作成する。

日本とアフリカの小中学校連携 を軸とするESDモデルの構築・

実践の試み

国際基督教大学

代表者 北原和夫

目的

ESDに対する基本的な考え方

人々が移動し通信するグローバル化の時代においては、全く条件の異なる自然や社会の中にある人々が共有できる知や技の素養を見だし、実際に教育プログラムの中に実装することによって、対等の立場で、持続的な世界を構築していくことによるのみ、「持続可能性」を真に永続的なものにすることができる。

そのための第一歩として、交流協定を締結している国際基督教大学とケープタウン大学(UCT)が、それぞれの近隣の小中学校ならびに教育行政部局と協同して、初中等教育レベルのESDモジュール(カリキュラム構成、教材、教授法を含む)の開発を行う。

持続可能な開発のために有効な、地域の伝統的知に根ざした「アジア・アフリカの智」の可能性を追求する。

組織

- 日本側(国際基督教大学、おおさわ学園)
企画運営委員会
実行委員会
プロジェクト事務局
- 南ア側(ケープタウン大学)周辺の小中学校

活動

2008年12月5日第一回企画運営委員会 (ICU) : 事業の発足
2008年12月18日第一回実行委員会 (羽沢小学校)
2009年1月上旬長尾委員が南ア訪問、ケープタウン大学側の担
当者と打合せ
2009年1月16日おおさわ学園「地域の特色を生かした小・中一
貫教育の創造」公開授業研究発表会 (第七中学校)
2009年1月23日第二回実行委員会 (大沢台小学校) : 南ア派遣
について
2009年2月11日電話によるUCTとの事務連絡会議
2009年2月13日第三回実行委員会 (第七中学校) : 派遣日程と
行動計画 (2009年度における相互訪問も含めて)、映像収録
担当者決定。
2009年2月18日第二回電話によるUCTとの事務連絡会議
2009年2月25日派遣メンバーとUCTとの電話会議

南ア派遣

2009年2月28日—3月7日日本側派遣団

国際基督教大学教員1名、事務局スタッフ2名、お
おさわ学園教諭3名、映像担当者1名

UCTならびに現地学校を視察訪問して、南アの現状把
握、ESDモジュール開発に関する今後の共同作業の
在り方を検討。

期待される成果

今回の派遣によって、日本側委員の南アの教育事情の
理解を深め、また両国の教員間の相互理解によって、
自然と社会の条件の異なる地域と文化においても有
効なESDモデル共同開発の基盤を作る。そのための
資料としての映像を作成する。

帰国後資料を整理して、3/10の報告会において紹介する。

南ア訪問の報告

- 2/28成田発 3/1ケープタウン着
- 3/2 ケープタウン大学School Development Unit訪問、開発教育ゼミ



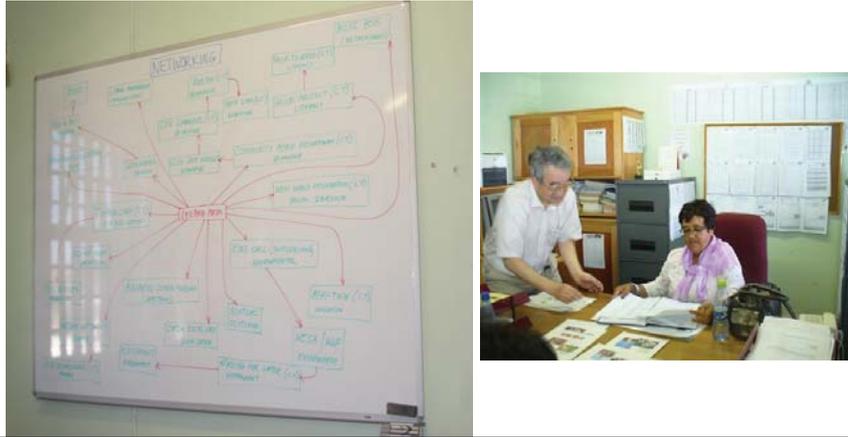
3/2 Rockland小学校訪問

- Rockland小学校SEEDプロジェクト: 持続的農法、学びのゴールを設定する教育



3/3Levana小学校

- ESD=Networkの考え方



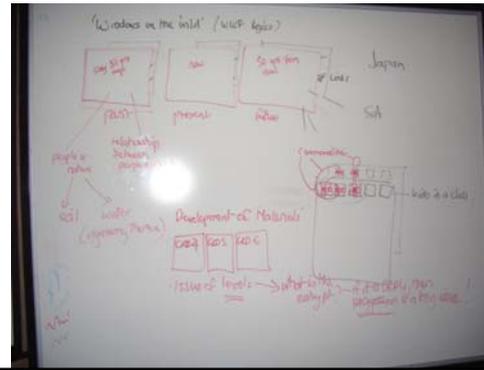
3/4

Stellenbosch持続可能性研究所

- ここでは、Stellenbosch大学の機関として、実際にsustainableな町づくり、教材開発を行っている。大学院教育
- 持続性農業、再生可能エネルギー、開発政策、経済などの総合的かつ実際的な教育

3/5総合討論と懇親会

- UCTスタッフ、学校教員、政策担当者(文科省、環境省)集合



ESDへの考え方

- 人と自然、人と人の調和ある関係の持続による民主的持続的世界の構築を、将来の子どもたちに託す。
- ローカルな課題に取り組む中で、グローバルな持続性を創出する。
- 現在の自分のまわりを見るとともに、過去の状況を調べ、将来の在り方を考える。その際に、それぞれの伝統智を重視する。
- 「絵」を通して、言語・文化の障壁を超えて、両国の子どもたちが、知識、経験、ビジョンを共有する。